

**機関車の如き力強さ、ぶれることなき粘り強さ
 吉岡理事長が仲間と歩んだ「炭鉄港」日本遺産認定までの足跡を追う**

【29年前】 1994年、吉岡理事長による「炭鉄港」への着想は、室蘭製鉄所の門前町である輪西地区とのご縁から。そこで空知の炭鉱と類似する結びつきを感じたことに端を発す。そのほぼ同時期、札幌で展開していた新型路面電車（LRT）の市民活動を通し、小樽の国鉄手宮線跡にLRT導入の市民活動を行っていた、故小川原格さん（運河保存活動の主要メンバー）との出会い。**この繋がりが後の「空知」「小樽」「室蘭」を主とする地域連携に昇華することに。**



【18年前】 2005年11月夕張市にて「炭鉱遺産サミット」を開催。空知産炭地域の8名の首長が集まり、炭鉱遺産を手がかりにした地域活性化を協議。

【16年前】 2007年の道庁委員会（産業観光振興検討会議：吉岡委員長）において、これまで温めていた「炭鉄港」の具体的な姿が初めて文字として記される。

【14年前】 2009年3月、「元気そらち！産炭地域活性化戦略（空知産炭地域活性化戦略会議（吉岡委員長）空知支庁発行）を作成～空知における2018年までの年次目標を定め、現在に至る原型を示す。

【14年前】 2009年8月、活動拠点とスタッフの常駐を目的とし、岩見沢市内に「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」を開設。時代は新たな観光コンセプトとして「ハブ観光」が打ち出され、その具体化に向けた取り組みとして「炭鉄港」が位置づけられる。

【22年前】 2001年、炭鉱遺産を巡って歩く「幌内歩こう会」を発足。その後4年間で21回、延べ約700名が参加。現在も続く「ぷらぷらまち歩き」の原点的活動の始まり。



【20年前】 2003年ドイツルール地域で地域活性化プロジェクトに関与したブロックハウス博士を迎え、幌内炭鉱跡地に通路を急造、廃墟の内部を片づけて約100名が参加するフィールドワークを開催。**ルール地域で展開される景観公園と炭鉱遺産の価値表現について示唆**を得る。

《元気そらち！産炭地活性化計画》
 当NPOサイトよりダウンロード可

元気そらち！産炭地活性化戦略

2010 炭鉄港～振り向けば、未来～「そこは、近代北海道」北の近代三都物語として、小樽・空知・室蘭の3拠点&3ヶ月間の連続催事を開催（道央地域観光戦略会議）



【12年前】 2011年、日本観光振興協会の産業観光ワークショップを開催。空知、小樽、室蘭の活動メンバーが互いに現地を訪問し、最後は札幌ファクトリーに結集。ワークショップと大懇親会を開催し、**3地域の連携が具現化する画期的な事業が行われた。**



【4年前】 2019年4月、日本遺産選定最終年度につき一発勝負の認定審査へ。“選外”か“当落線上”との厳しい声が聞こえる中、NPOが指定管理を受託し「炭鉄港」において重要な施設である夕張市石炭博物館の模擬坑道で原因不明の火災が発生し深刻な事態に陥る。当該審査はこの火災発生中に予定通り実施することとなり、吉岡理事長が上京し文化庁のヒアリングへ挑む。審査員からの模擬坑道火災の影響を心配する声を前に**「炭鉱とは、困難を幾度も乗り越えるものだ！」**という主旨の熱いプレゼンを実行。空気を一変させる。

本邦国策を北海道に観よ！
北の産業革命「炭鉄港」
 2019年5月、長年の想いが実り念願の日本遺産認定



【8年前】 2015年、「炭鉄港」のルーツである「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録される。（その重要な位置づけを持つ鹿児島県で薩摩藩主・島津家の資産を継承し観光事業等を展開している株島津興業の島津忠裕社長と吉岡理事長は、2003年から関係を築き現在に至る。）

【7年前】 2016年、空知総合振興局から「炭鉄港ストーリー」を受託。吉岡理事長の膨大な知識と情熱を元に、「炭鉄港」のストーリーが形となり、日本遺産認定に向けた大きな一歩となる。

《炭鉄港ストーリー》当NPOサイトよりダウンロード可



【5年前】 2018年、日本遺産認定へ向けた動きが活発化。7月、各市町村、観光協会、商工会議所・民間企業・関係機関など計53団体が加盟する「炭鉄港推進協議会」が発足。9月「ツーリズム Expo ジャパン 2018」にて「炭鉄港」が全国デビュー。11月、札幌にて空知総合振興局主催の「炭鉄港セミナー」が開催され、会場が満員となる500名以上の来場者となる。



故吉岡理事長の偉大さは皆様もご承知の通り、その膨大な知識と行動力ですが、それと共に緻密な計画を立て、笑顔で粘り強く実行し続ける人並み外れた情熱があります。結果20年以上の歳月をかけ「負の遺産」と呼ばれがちな炭鉱遺産等に新たな価値を与え、日本遺産にまで昇華する原動力となりました。しかし、残念なことに認定後はコロナ禍となり、本人が思うような能動的な活動は叶わず・・・。

今節はいよいよ経済活動も再開され始め、正にこれからというタイミングで急性大動脈解離にて急逝。本人もさぞ悔しがっていることと思います。しかし今日まで培われた活動は多くの仲間引き継がれ、各地で蒔かれた種は必ず芽吹き大きく育つと確信しています。そしてその種とは残された私達一人ひとりなのだと思うのです。ぜひ地域の未来に向かい、吉岡理事長の意思と共に歩んでいただければありがたく存じます。

〈NPO 法人 炭鉱の記憶推進事業団役員一同〉

吉岡宏高さんを偲ぶ会

令和5年1月14日(土)

12:00 開場

13:00 開式

式次第

- 1, 開会の辞
- 2, 式辞
- 3, 黙祷
- 4, 故人の紹介
- 5, 追悼のこトバ
- 6, 献花
- 7, 謝辞
- 8, 閉会

* 閉会后、会場には15時まで滞在いただけます。ぜひ展示等もご覧ください。

* 新型コロナウイルス感染症対策として、マスクの着用、会話をご遠慮いただきます様お願いいたします。

〈故人の経歴〉

吉岡宏高 (よしおか・ひろたか)

NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団 理事長

夕張市石炭博物館 館長

株式会社島津興業 顧問

● 生年月日 1963 (昭和38) 年10月1日

● 出身地 三笠市出身

○ 三笠市立幌内小学校、三笠市立幌内中学校、岩見沢東高等学校、福島大学経済学部経営学科を卒業 [1986年]。社会人になってから札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科を修了 (修士/地域社会マネジメント学、2004年)、金沢大学大学院自然科学研究科環境科学専攻 (博士後期課程) 単位取得満期退学
○ 1986~1992年・日本甜菜製糖(株)芽室製糖所で経理、東京本社で新規事業企画を担当。

1992~1997年・(株)たくぎん総合研究所で主任研究員として道内各都市の地域計画・都市計画策定に携わる。

1997年・まちづくりコーディネーターとして独立。

2004~2020年・札幌国際大学観光学部教員 (専任講師→助教授・准教授→教授)。この間、教員として学生の教育にあたる一方、まちづくりコーディネーターとしての活動も継続し、道内各地の地域資源を活用した観光交流の政策立案や市民主体の地域活動のサポート、道内各自治体での政策形成の支援や職員研修の講師も勤めた。

○ 出身地である三笠市を中心とした空知産炭地域では、これまで「負の遺産」と捉えられてきた炭鉱遺産を地域固有の資源として活用して地域を活性化する活動を1999年から実践している。2007年6月に、空知管内で展開されてきた市民活動をベースにNPO法人炭鉱の記憶推進事業団を設立し理事長に就任。2018年からは、同法人が夕張市石炭博物館の指定管理を受託したことに伴い館長に就任。

○ 認定NPO法人霧多布湿原トラスト・アドバイザー (元理事)、NPO法人北海道コミュニティシネマ札幌・理事、一般社団法人北海道まちづくり協議会・顧問。北海道観光審議会特別委員 (北海道/2000~2001年度)、北海道地域づくりアドバイザー (北海道/1995年度~)、そらち・炭鉱のまちからの挑戦事業地域づ

くり検討委員会委員副委員長 (空知支庁/2001~2003年度)、活力ある市街地づくりの推進方策に関する調査研究会副座長 (北海道市町村振興協会/2001~2002年度)、日高・広尾地域における生活モビリティ形成検討委員会委員長 (北海道運輸局/2004年度~)、恵庭市総合計画審議会委員 (恵庭市/2004~2005年度)、過疎地域を考える懇話会委員 (北海道/2006~2008年度)、空知産炭地域活性化戦略会議委員長 (空知支庁/2007~2008年度)、産業観光検討会議委員長 (北海道経済部/2007年度)、道央地域観光戦略会議会長 (北海道経済部/2008~2012年度)、清水町総合計画策定アドバイザー (2009~2010年度/清水町)、小樽市文化財審議会委員 (小樽市教育委員会/2013年度~)、北海道地域おこし協力隊起業支援プログラム検討会議・人材育成検討会議座長 (2014~2015年度/北海道総合政策部) など、100件以上の公職を歴任。

○ 著書: 『炭鉱遺産でまちづくり』2005年・富士コンテム (単著)、『明るい炭鉱』2012年・創元社 (単著)、『交通まちづくり』2006年・交通工学研究会 (共著)、『産業観光への取り組み』2007年・(財)日本交通公社 (共著)、『福島 農からの日本再生』2014年・農山漁村文化協会 (共著)

【ご案内①】

本日は吉岡宏高さんを偲ぶ場として、著書や炭鉄港に関するブックレット等も販売いた

しております。ぜひ故人の思いを読み取っていただければ幸いです。(数に限りがありますので、売り切れの際はご容赦願います)



【ご案内②】

皆様に故人の功績を感じ、また懐かしんでいただきたく、会場内に展示ブースを設置しています。それぞれ所縁のある担当が思いを込めた、テーマごとのブースとなります。ぜひお時間の許す限りご覧ください。

【エピソード】

当NPOでは、毎年お盆の時期になると、幌内線跡、唐松駅、奔別炭鉱跡等々で場所を変えながら沢山のろうそくを並べる「線路の灯り」や「炭鉱の灯り」を開催しています。その時に、吉岡理事長が決まって発する言葉があります。「炭鉱遺産に関わる者として、負の側面も受け止めることが大切。このろうそくの灯りは追悼の意である。だから、例えば1人になっても、1mでも1個でも、毎年続けていくのだ。」と……。今年はその言葉を聞くことはできません。でも1人になっても、1mでも1個でもの言葉は私たちに受け継がれ、今年は一ひときわ意味深い追悼の場面になるのです。



— 御礼とお願い —

本日は大変ご多用の中、ご参列賜りましたこと心より感謝申し上げます。偲ぶ会は当NPO法人が主体となり実行委員会を設け準備を進めてまいりましたが、何分一同不慣れなため、大変な失礼もあったのではないかと懸念するところです。どうかこの場に免じてご容赦いただければ幸いです。またNPOの今後の活動につきましては、唯一無二の存在であった吉岡理事長を失ったことにより、非常に心細く、不安の中で藻掻いている状況です。しかしながら、これまで育まれた礎をしっかりと踏みしめ、新たなステップへ向かうべく一同努力していく所存です。そのNPO活動の本懐は、吉岡理事長も目指していた「活動に賛同していただける仲間を増やしていくこと」です。つきましてはこのような場で大変不謹慎とは思いましたが、その本懐を大切にすべく、入会案内も同封させていただいた次第です。失礼をお詫びしつつ、どうか温かなお力添えを賜ればありがたく存じます。

〈NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団役職員一同〉